

平成 22 年 6 月 17 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720061

研究課題名（和文） 近代ドイツ言語論における詩の位置 ヘルダーリンを中心に

研究課題名（英文） The location of poetics in Modern German Linguistics -- with a focus on Hölderlin--

研究代表者

畠山 寛（HATAKEYAMA HIROSHI）

聖心女子大学・文学部・講師

研究者番号：30401160

研究成果の概要(和文): 後期ヘルダーリンの言語観と歴史観との結びつきを接続詞の使われかたを分析することで明らかにするとともに、文献学において多大な影響をもつゾンディのヘルダーリン論の翻訳を通じ、詩論がいかに詩学構想と結びついているかを考察した。また、ヘルダーリンの手稿のほとんどが保存されているヘルダーリン・アーカイブに行き、詩人の手稿を精査することで、筆致と詩の構想とが密接に関わっていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文): I have elucidated the usage of conjunctions in the later works of Hölderlin, through analyzing the relationship between his view of history and that of language. Simultaneously, through the translation of Szondi's argument on Hölderlin-Studien which has a tremendous impact upon philological study, I have investigated how deeply his poetics is interrelated with his concept of poetry. Also, by visiting Hölderlin Archive where most of his manuscripts are preserved, and by scrutinizing them, I have clarified profound connection of his pen strokes with his concept of poetry.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,400,000	420,000	2,820,000

研究分野：ドイツ文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ドイツ文学、ヘルダーリン、詩

1. 研究開始当初の背景

研究開始時、わたしはフリードリヒ・ヘルダーリン(1770-1843)のテクスト分析を行ってきた。その際、従来の詩作品の解釈にしばしばあるような、詩作品の逐語的解釈や、実証的研究、哲学的なアプローチをとることな

く、一貫していくつかの品詞、すなわち固有名詞、抽象名詞、形容詞の最上級などの詩における機能に注意を払ってきた。この方法を取ることによって、詩人の言語観を抽象的な理論的論文からではなく、実際の言葉の使い方から明らかにしてきた。これはヘルダーリ

ンの独自性が解明されると同時に、ヘルダーリンがなぜ現代に至るまで、文学の領域ばかりでなく、哲学にまで大きな影響を持ちうるかの説明も可能となる研究であった。

このような研究を通じて、ヘルダーリンの言語観と歴史観がどのような形で結びついているのか、という分析を深めていくことが、ヘルダーリン理解において必要になっていった。

また、ヘルダーリンが現在にいたるまで受容されているその理由が、時代とどのように関わっているのかを調べていくことが、ヘルダーリン理解には不可欠になっていた。

2. 研究の目的

後期ヘルダーリンの詩作品に通底している言語観と歴史観との結びつきを明らかにすることが一つの目的であった。このことを明らかにすることで、ヘルダーリンの後期の詩作品がどのように構想されているのかも明らかになると考えられた。そのさい、着目したのは接続詞の使いかたになる。それは、接続詞が後期ヘルダーリンにおいてはきわめて特徴的に使われているからである。

また、ヘルダーリンが19世紀以後、どのように発見され、どのようにして注目を浴びることになったかを、受容した者が有していた言語論を見ることで明らかにする。「ある時代の言語観および詩観と、文学作品の受容とは密接に関わっている」という仮説がたてられた。当研究の主眼となるのは、作品に対峙したときに、その作品の現代性を、その作品が生まれた時代の言説との関係性のうちに捉えることにある。これはヘルダーリンがどのように研究されているかを見ていくことで可能となるものであった。

作品の受容のされかたは、作品の内容そのものを分析することで説明がつく部分もあるが、それ以外にも、その時代ごとのイデオロギーの要請に合う形で作家なり作品が受容される側面も大いにあるだろう。しかし、それが意味するのは、作品に、それが受容された時代に即した解釈を可能にしてきた要素がある、ということだと考えられる。だが同時に、作品を受容する準備があったからこそ、作品は受容され評価される、と言える側面もあるだろう。ヘルダーリンの作品が文献学的にどのような影響を与えてきたのか、ということを探ることで、作品に、それが受容された時代に即した解釈を可能にしてきた要素があるのではないかとすることも考える。

また、当研究を通じて、考察すべきことの一つは文献学の方法そのものを問うことである。現在、文献学はどのように可能なのか、また、今後どのような研究が可能であるのかを、現在でも重要な文献学者と目

されているペーター・ソンディの研究を分析することで考察していく。

3. 研究の方法

当研究の遂行にあたって、まず何よりも必要なのは、資料の綿密な読解である。そのためにはヘルダーリン関係の図書ばかりではなく、ドイツ言語哲学関係の図書を渉猟しなければならない。

また、特にドイツのシュトゥットガルトにあるヘルダーリン・アルヒーフを訪れ、そこで資料を集めることは必須となってくる。ここにはヘルダーリン関係の二次文献のほとんどがそろっているの、ここで文献収集をすることになる。また、このヘルダーリン・アーカイブには、二次文献のほかに、詩人の手稿のほとんどが保存されている。ここで直接ヘルダーリンの手稿を見ることは、後期ヘルダーリンの研究においてはきわめて重要な作業となる。ヘルダーリンの手稿がファクシミリ版で出版されているフランクフルト版全集があるとはいえ、やはり実際の手稿をみることで新しい発見があるからである。

特に翻訳の作業が必要となってくるのが、日本のほかのヘルダーリン研究者との協力である。わたしはヘルダーリン研究会に所属しているの、ここで最新の研究成果を聞くとともに、自分の研究に関して多くの意見を聞くことで研究を深めることができる。

4. 研究成果

当研究の研究成果を年度ごとに記述する。

(1)

平成19年度の研究成果として、まず、論文『パンそして葡萄酒 後期ヘルダーリンの接続詞と歴史のリズム』を発表した。当論文では、ヘルダーリンがいかに古代と近代とを捉えていたか、また、それがいかにヘルダーリンの言語観と結びついているかを示した。

近代の詩人であるヘルダーリンにとって、自らの芸術の規範とも模範とも言える古典ギリシアを、どのように自分の詩学と連結させたかを解明するとともに、その連結作業そのものが作品を構成していることを明らかにした。古代と近代というテーマは、ヘルダーリンの同時代の言語学者フンボルト、ヤコブ・グリムなどにも共通する問題であり、本研究の土台ともなるものであった。ヘルダーリンばかりではなく、その時代が共有していた世界観としての、古代と近代との関わりを考察していくことは、ヘルダーリンの詩の受容性と密接に関係しているからである。

また、ヘルダーリン研究ばかりではなく、広く文献学のありように今もって多大な影響を与え続けているペーター・ソンディの

『ヘルダーリン研究』の翻訳に着手した。難解なテキストではあるが、この翻訳の作業を通じて、ヘルダーリンがいかにかに読まれるのかを考察する足掛かりともなった。すなわち、この翻訳作業を通じて、ヘルダーリンの作品が現代の私たちにどのように読まれるのかを、改めて考察することとなった。なお、この翻訳は、「ヘルダーリン研究会」での議論を尽くして行われた。このヘルダーリン研究会に参加している研究者との討論や意見交換を通じて、私自身の研究の幅を広げることができた。

夏に渡独し、ドイツのヘルダーリン協会の本部が置かれているチュービンゲン、また、ヘルダーリン関係の資料が集められているマールバッハの文学史料館、さらにはシュトゥットガルトのヘルダーリン・アーカイブに行き、本研究に必要な資料の収集を行うことができた。

(2)

平成20年度の研究成果として、まず、昨年から取り組んでいたペーター・ソンドイの『ヘルダーリン研究』を法政大学出版から刊行できた(2009年1月)ことが挙げられる。この研究書ではまず、文献学の方法論が述べられ、それを受けてヘルダーリンの後期讃歌の分析と解釈がおこなわれ、続いて詩論をめぐる研究史批判と詩学構想の解明を展開している。

そのことからわかるように、この研究書ではヘルダーリンに関する研究がなされているだけではなく、文献学の方法および、文献学における認識とはどのようなものであるべきかという文学研究にとって根本的な問題を扱っている。そういう意味で、この本が翻訳され出版されたのは、ヘルダーリン研究だけではなく、文学研究全般において大きな意味をもつものである。また、今もって、ヘルダーリンがなぜ重要な詩人であるのかが明らかになっただけではなく、文献学の方法そのものを問うソンドイの研究方法は今後の研究に大きな示唆を与えることとなった。

難解なテキストだけに、数年来ヘルダーリン研究会で議論を重ねてもなかなか結論にいたらなかった個所も多く、最終的な訳稿を出すまでに思いのほか時間がかかった。だがこの翻訳作業を通じ、研究会に参加している研究者との意見交換や議論を重ねることができ、自分の研究者としての幅を広げることができたのも大きな成果であった。

この年度でも昨年度に引き続き渡独し、ヘルダーリン関係の文献が集められているシュトゥットガルトのヘルダーリン・アーカイブに行き、本研究に必要な資料の収集を行った。主に悲劇『エムペドクレス』関連の二次

文献を集めることができた。

(3)

今年度は平成20年度に引き続き、『エムペドクレス』における悲劇の構造について研究を進めた。だが作品を詳細に分析している過程で、この悲劇でヘルダーリンが表そうとしている「自然」と「人為」の「調和的対立」が、悲劇形式がもつ言語表現のありかたでは表現できない、換言すれば悲劇形式がヘルダーリンの詩的言語を許容していないのではないかと考えるにいたり、当研究の方向を若干修正することになった。そこで着目したのが、後期の断片の一つ『ティーターン神族』である。

後期ヘルダーリンは、行間だけではなく、紙の左右の余白まで使って推敲に推敲を重ねていくことはよく知られている。この断片にもまた、ヘルダーリンのそのような書きぶりが表れている。実際にどのようにヘルダーリンが言葉を書き足しているのかを見ることは、後期のヘルダーリンの詩を分析するために非常に意義のあることから、ヘルダーリンの手稿のほとんどが集められているシュトゥットガルトのヘルダーリン・アーカイブに行き、この断片の手稿を入念に調査してきた。現在、そこで調べられたことを論文にまとめているところである。

この断片の下敷きとして、ヘルダーリンの歴史観の根幹にある神々の闘争、ティーターンマキアーがあり、それが現在の視点から捉えられている。現在取り組んでいる論文で、後期ヘルダーリンにおいて、言葉の使い方がいかに詩のテーマであるティーターン神族と結びついているか、また、ティーターン神族がヘルダーリンの歴史観を形成する大きな位置を与えられているかを解明できるものと思われる。

また、ヘルダーリン・アーカイブの所長と現在のヘルダーリン研究のありかたについて議論を重ねることができたのも非常に大きな収穫となった。日本だけではなく、現在ドイツでどのようにヘルダーリンが論じられているのかを知ることで、自分自身の研究の位置づけが可能となるからである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

皇山 寛 パン そして 葡萄酒 後期ヘルダーリンの接続詞と歴史のリズム、ドイツ文学、査読有、133巻、2007年、55-69

〔その他〕

翻訳

畠山 寛他、法政大学出版、ヘルダーリン研究、ソンディ著、2009

6 . 研究組織

(1)研究代表者

畠山 寛 (HATAKEYAMA HIROSHI)

聖心女子大学・文学部・講師

研究者番号：30401160